

# 官舎漫談

(六)

## 在官舎一同

いつ植ゑたか知らないが大きな櫻の木が小さな我々の住む官舎をとりまいて居る、そして官舎の隆昌と共に益々繁茂し今はまるで林の様である。

春は爛漫たる櫻花の中に、夏は鬱蒼たる青葉の中に——と云ふと何如にも極樂の様な所だが併し此極樂にも夏から秋にかけて夥しく毛虫が繁殖して、大切な櫻の葉をみんな食べてしまひ秋の美しい紅葉を見ない年が時々ある。昔の事は知らないが現在此の極樂の様な官舎に五人の變り者が住んで居る。北の官舎にY、K、M、の三人が各々一室を占領しお互に主人顔をして居る。Y、K、兩人は本年度養蠶科卒業生、Mは十三回養蠶科卒業生官舎で一番古狸だ。南の官舎にはK、U、Oの二君が故田中氏の後を受けて仲よく暮して居る。御二人共目の前に陸軍少尉正八位とか云ふ嚴めしい肩書をぶら下げ得意然として居る、道理で兩君此の頃の機嫌がよい。

何れも呑氣者の集りであるから三面記事を賑はす様な珍らしい事や面白い事を平氣でやらかす。かつてMが着て居た羽織を落して大笑の種になつた事や、今N縣廳に勤めて居るNが珍らしい財布の落とし方をして新聞紙上に現はれた事等は最も好い例である。お蔭で兩人男を下げてつひ先頃まで氣の毒な程小さくなつて居つた。

X

X

X

X

—

今年の一月からの事を書いて見る。財布事件で有名になつたNが一月一パイで北の官舎を出たので、北の官舎はDとMの二人きりになつた。三人の所を一人減つたのでDがいくら大きな地聲を出しても少しも賑やかな氣になれない。二人

共淋しくなつたので誰か入ることを待つて居つた。其の内に三月になつた。新卒業生が澤山出た。今度こそ必ず誰か入るだろうと思つて居ると四月にKとYが入つた。暫くすると依田君もデルタの南の平尾の家に移つて来て官舎で飯を食べる事になつた。今まで淋しかつた官舎も春と共に明るい氣分になつて相變らずの賑かさになつた。依田君の家の事を我々は官舎の別荘と呼んで居る。昔、長野の松村さんがお住みになつて新婚の夢聞らかな所であつたと聞く、其の後製糸科の松岡さんが數年間お住みになり大分女くさくなつた。松岡さんの後へ宮崎の中嶋さんが入つたので此家と官舎とは親しくなつて來た。田中さんの亡くなられた時の事だ、いつもの元氣に似ずいつも通ひなれた近道の藪の中が恐ろしいと云ふて、わざ／＼デルタの方を廻つて行つたものだ。

X

X

X

毎年養蠶の時期になると北澤、山口若林さん等養蠶部の猛者連が一度にドツトおしよせて來る。たゞでさへ賑やかな官舎が一層賑やかになる。東寮や修己寮にも負けない程の賑やかさだ。婆さんも負けずに若いものと一所になつて大氣焔を吐くから面白い。近頃北澤さんはお嫁さんをもらつたので餘り顔出ししなくなつた。

X

X

X

官舎は兎に角我々の住居としては名前が好過ぎる。名前だけではどんなお歴々のお住居かと思はれるが寧ろ助手合宿所とした方が適當した名前だと思ふ。

今年の夏の事だ。夜も十時を過ぎたのでポツ／＼寝やうと思つて居ると「御免下さい」と呼ぶものがある。婆さん芝居に行つたのか眠つてしまつたのか一向に返事がない。近くのKが出て行つた。「校長先生にお目にかゝりたいのですが御住宅でせうか——」之にはKも驚いた。

併し住む人間は助手の數人だ。時々修己寮や東寮宛の手紙が舞ひこんで來る。學生の寄宿舎と間違へたらしい之には我々も閉口する。

誰が植えたか知らないが玄關の前に一本の大きな柿の木がある。濃い柿だ。一年おきに澤山の柿がなる。其中二割位甘いのが混つて居る、夜、時々東寮の學生が襲ひに来た事がある。我々もよい年をして子供の様に木に上つて甘いかわからない様な柿を食べ出す、手のとどく所の柿はみんな齒の跡を残して居る、K等は之が日課の一つだつた。

一昨年秋の事だ、今は時めく某縣のお役人、假にSとして置く、其の日は天氣はよし家の中になつて居られない様な好い日曜日だつた。遊ぶ相手もないので官舎にやつて来た、頃しも東南隅にある小さな柿の木においしそうな柿が枝もたわゝになつてゐて恰度食べ頃だつた、之を見付けたS、早速味を試み様とした、スルト何と思つたか一匹の蜂が出した手にとまつた、驚いて拂ひ落さうとしたらチクリと一つ刺してSの着物の袖口から体の中へ入つてしまつた。

そして思ふさま腹や脊中をチクリチクリやり出した。驚いて出さうとしたが出ない。Sは狼狽で、帯を解くや否や眞裸体になつて裸ダンスをやり出した、見てゐるものも氣の毒だつた。之も官舎で大事にして置いた柿に手を出した罰があつたのかも知れない、

之も昨年冬の事だ、静かな夜だつた、誰もゐない、DとMと二人きりで炬燵の中で寒さうな顔をしてしんみり話して居た。すると婆さんの室の方でコトリ／＼と變な音がした、今日は婆さんは居ない、變だ、不思議だ、無論鼠の音でもない、泥棒かも知れない、二人で恐る恐るマツチをすつてよく見たが誰もゐない、暫くすると又コトリ／＼やり出した、再び見たが誰もゐない、餘り氣持もよくないので二人共薄團をかぶつて寝てしまつた。翌朝起きて顔を洗つて居たら床下から榊原さんが可愛がつて飼つて居つた一匹の黒犬が氣持よさうに出て來た。

一日官舎の本棚の中をどんなものがあるかと思つて好氣心を以て見たら次の様なものが出て來た。

宿 帳 (上田蠶糸専門學校官舎)

上野 榮 仁 FIII  
須田 圭 二 SHI  
白澤 忠 雄 SV  
兒玉 宜 夫 SIV  
三橋 宜 夫 SIV  
井出 滿 藏 SV  
樋口 琢 鷹 SV  
松村 季 美 SI  
齋藤 菊 雄 SVI  
鹽原 克 巳 SVI  
大井 益 學 SVI

SEMPŪ.

IDEMAN.

TYOBEL. UMA.

KISOHATTI.

April 1918—1923 dec  
April 1919—  
May 1919— April 1921  
N-ONI. MIKURO.

July 1919—  
NEBO-MANNEN.

Sept 1919—Jan 1920  
OTOMARU.

April 1919—  
KANTA.

木 長 池 長 田 東 古 林  
寅 寅 遊 得 幹 貞 三  
熊 龜 一 太 三  
FIII  
SHI  
SV  
SIV  
SIV  
SV  
SI  
SVI  
SVI  
SIII  
SIV  
FVI  
FIII  
SVI  
FIII

石坂虎次郎 FV TORAZO.

April 1920— 山本岩三郎 SVII

上林多兵衛 SVII

宮入誠一 FV

遠藤文平 FI

April 1921-August 1922 石原石司 SVIII

” —March 1922 根岸丑之助 SVIII

” —November 1922 三輪杉人 SVIII

April 1921-April 1922 小林繁 SVIII

的場小六 FVI

May 1922— 越智岩平 SIX GANPEI.

” —November 金崎眞英 SIX TETORA.

” — ” 堀忠太郎 FIX TRIANGLE.

鈴木教吾 FVIII

甲田勝衛 FVII

August 1922— 中田太郎 SVII TARO.

1923 April— 1926 sept 山本三六郎 SX JIGUSU.

” —November 北澤周一 SX HIMIKO.

” —August 雨宮章 SX

"	—November	中村 出 俊	SX	
1924 Jan-	1927 April	岸 善 亮	SIX	DANCHO, GOKI
1924 April-		中 嶋 茂	SXI	ERAISHITTO.
"		田角 又十郎	SXI	WAKENO.
"		田 中 定 男	FIX	DRI.
1925 April-November		柿 田 實 作	SXII	
1925 May—		北 嶋 正 生	SXII	SEIKIN.
"	—August	山 口 定 次 郎	SXII	GOWAST
1925 May—August		若 林 茂 一	SXII	WAKA.
1926 April—1928 August		今 村 良 郷	SXIII	DOKYO.
1926 May-November		原 茂	SXIII	TSUTATE.
1926 Sep—		三 輪 貞 徳	SXIII	DENKA, OTTO.
1927 Apr-1928 Jun		野 口 活 也	SXIII	KWATSUBO.
1927 Apr-		窪 田 潤	FXII	ROKUGASTU.
1927 Nov-		萩 原 清 治	FXII	HOKEN.
1928 April-		小 林 貫 一	SXV	KANBACCHO.
"		遠 藤 正 壽	SXV	HACHIBUKAN.
此々各誌掲載ありしを編輯せられたり。				

X

X

X

官舎に居られた先輩に申上げます。之は山本さん等がやりかけた仕事ですが今度官舎アルバムを完成し様と思ひます  
何卒お寫眞一葉お恵み下さ。 (三〇・一一・一七)

## 甘茶會由來記

山口生

「今の世に於て藝術を説くは痴人の事と稱せらる。藝術は法律の如く國を治むる能はず軍隊の如く敵と戦ふあたはず、然も尙能く人を幸ならしむ。人は謂ふ藝術は遊戯のみと誠に然りされど是の憂患に充てる人生に於て尙遊戯の地を存するはせめてもの慰藉にあらざるべきか」……と今更樽牛の文を借りる必要もなからうがこんなことをさへ解つてはくれないだらう人々が今も尙澤山ゐることを悲しまねばならない。こんな意味に於ても、ともするとドライになり勝ちな上田の學校に、甘茶會がありそしてそれが何んなものであるかを知るのも滿更無益ではなからうと思ふ。

甘茶會が Amateurs から轉じてゐることは大抵の世人は知つてゐることと思ふ。此の會の命名者には表賞したい程その名前がしつくりしてゐる。學校内及關係者のその道の小天狗達がその仕事の餘暇や一週一度來る日曜をあてに製作に腐心した結晶の現れを此の年に一度の甘茶會が心ゆくまで彼等相互の作品の觀賞や批評をさしてくるのである。

油繪がある、水彩がある、日本畫もある漫畫もあるパステル、コンテ、鉛筆、木炭、等あらゆる種類の繪が並べられる。それから寫眞がある。寫眞はその數に於ていつも第一位である。製作に割合に容易なものだからでもあらう。帝展の美術品として未だ寫眞がその中に加へられてゐないからやがては吾々の甘茶會がその仕事をやらうといふ意氣込みみである、尙彫塑がある是は數に於て少ないがその中に盛になることと思はれる。

甘茶會が生れたのは大正十二年(一九二三)の春五月である、その年は大變な好評だつたし又皆えらい意氣込みだつ